

## アポロンになったキリスト

—ギリシア、オシオス・ルカス修道院滞在記—

水 落 健 治

想い起こせば今から10年余り前になる。1994年9月の半ば<sup>(1)</sup>、当時在外研究の機会を得てドイツ・ミュンヘンで研究生活を送っていた私は、家内と共にギリシアを巡る旅に参加した。

旅行は、ミュンヘン大学の裏に事務所を構える研修旅行専門の旅行会社 Studiosus Reisebüro の主催するツアーで、ガイド兼ツアー・コンダクターとしてフライブルク大学で考古学を学んだギリシア人の女性研究者がつき、20人足らずの参加者が一週間余りペロポネソス半島とギリシア本土のコリントス湾沿いを巡る旅であった。参加者はすべてドイツ人で、私と家内は唯一の外国人であった<sup>(2)</sup>。

朝早くミュンヘン空港に集合した私たちは、炎天下のコンクリートの上を長々と歩いた後、空港の端の方に止まっているあまり大きくもないルフトハンザの旅客機に昔風のタラップの階段を登っ

て乗り込み、2時間程でアテネ<sup>(3)</sup> 空港に降り立った。気流に翻弄される飛行中の小さな機体の感触、着陸前の航空機の窓から見える真っ青な海、アテネの町を真っ白に覆うスモッグ——すでにこれらのものが、これから始まる旅行のただならぬものであることを予感させていたが、航空機から一步外に出て感じたアテネ空港の湿度のない、それでいて40度にもならないとする空気とギラギラとした太陽の陽射しは、私たちがこれから赴こうする地が、これまで生活し、慣れ、経験してきた土地や風土とは本質的に異なるものであることを知らしめるのに十分であった。

\* \* \*

アテネ中心部のホテルに荷物を置いた私と家内は、夕方まで自由時間を与えられたため、とりあえずアテネの町がどのような所であるのかを知ろうと、地図を頼りにホテルの周りを歩き始めた。まずはホテルに程近い「シンタグマ」と呼ばれる交差点に出てみる。この名はギリシア語では「憲法（広場）」という意味だそうだ。交差点から周囲を見回すと「トラペザ」という文字がやたらに眼につく。古典ギリシア語では「机・テーブル」

(1) 9月9日-16日。

(2) 旅行中の言語がドイツ語であったことは言うまでもない。以下のスパルタの所で述べるように、ドイツとギリシアとの間には歴史上特別な関係があったため、ドイツ人（特にバイエルンの人々）とギリシア人はお互いに非常に親近感をもっており、ドイツからギリシアへのツアーも非常に盛んである。私たちのツアーを導いてくれた2人のギリシア人ガイドのドイツ語も極めて流暢であった。

(3) 以下、地名のカタカナ表記については、現代ギリシア語の表記で行い、必要な箇所には古典ギリシア語の表記を付加する。

という意味だが、近くまで行って見てみるとどうやら「銀行」らしい。そういえば、英語の“bank”も、もともとは「両替屋のテーブル」という意味だったっけ…… 通りの向こうには国会議事堂が見え、その近くに小さな書店がある。近付いてショーウィンドーを覗くと、アリストテレスの『詩学』か何かのギリシア語の本文が無造作に広げられている。「ああ、ここはギリシアなのだ」——私は、熱い思いが胸の底から沸き上がって来るのを禁じ得なかった。

それから私たちは、午睡で人通りの絶えた炎天下の住宅街を歩き回った。あまり人も歩いていないせいか、そこここで飼われている猫が物珍しそうに出てきて私たちを見て、中には寄ってくるものもいる。猫好きな家内が撫でてみると、日本の猫とは大違い、スリムでヒョロヒョロで骨もゴツゴツとしていた。後で聞いた話では、ギリシアの猫はエジプト種の系統を引くものだそうだ。

地図で調べてみると、近くに考古学者シュリーマンの住んでいた家があるという。その近くには、使徒パウロがアレオパゴスで説教をしたことがきっかけでキリスト教徒になり、中世の時代に絶大な権威とされたディオニュシオス・アレオパギテス（アレオパゴスのディオニュシオス）<sup>(4)</sup>を記念する教会もあるという。私達はそこを訪れてみることにした。

まず立ち寄ったシュリーマンの家は、2階にアーチ型のバルコニーを持ち、庭に巨大な蘇鉄とおぼしき木が何本も生えている大きな屋敷だった。私たちは、ただ外から見ることしか出来なかったが、それだけでも、彼が金にあかせて大規模な発掘をあちこちで行い、夥しい遺物をドイツに持ち去っ

た様子が推測できた。考古学の残酷さ——そんな言葉が頭をよぎる。

そこから歩いて数十メートルの所にあるディオニシオス・アレオパギティス（ディオニュシオス・アレオパギテス）教会は、シュリーマンの家からでもすぐに分かった。教会の建物が、それほどに巨大だったからだ。暑い表道路に面した正面の入口から一步踏み入ると、中は暗く、静かでひんやりとした空気があたりを覆っている。「この暗闇は、新プラトン主義の影響のもとに、物体から人間・天使・神にまで至る被造物の階梯秩序を論じた神秘思想家ディオニュシオス<sup>(5)</sup>にいかにもふさわしいではないか」——そんな思いが頭を駆け巡り、私と家内は、しばしこの甘美な暗闇の中に佇んでいた。

眼が慣れてくると、中央の祭壇に向かってまっすぐな通路があるのが見えて来る。通路の両側には硬い木のベンチが並び、ベンチの後の入口に近い右側と左側には、2枚のイコンがあるのに眼がとまった。イコンは縦70センチ、横50センチ位の大きさで、ガラスのついた枠に入れられ、1メートル位の高さの支柱の上に斜めに設置されている。

するとその時、外の光の眩しさの中から、純白な衣装をまとった1組の男女が手を取り合って教会の暗闇の中に入って来た。ふたりとも、年の頃は20歳くらいだろうか、男は真っ白なダブルのスーツに白いシャツ、白いネクタイをしている。女も上下真っ白のタイトスカートのスーツだ。一目で新婚夫婦なのだと分かる。2人は手を取り合いながらイコンに歩み寄り、静かにひざまづいて、ゆっくりと、1人ずつイコンに接吻をし、それからおもむろに立ち去って行った。——そうだ、ギ

(4) 新約聖書「使徒言行録」17.34。

(5) A・ラウス『キリスト教神秘思想の源流——プラトンからディオニシオスまで——』水落健治訳、1987年、東京、教文館、第8章を参照。

リシアは、20歳の新婚の若者も教会に来てイコ  
ンに接吻するギリシア正教の国でもあったのだ。

教会から外に出ると、すでに陽は西に傾き、午  
睡から醒めた人々の喧騒が街を賑わせ始めていた。  
広い通りの舗道に所々設置されたキオスクは再び  
店を開け、ギリシア語や英語やドイツ語で書かれ  
た雑誌や、出たばかりの新聞や、2リットルのペッ  
トボトルに入った飲料水や、顎にまでも届こうか  
とも思われる巨大なペニスを突き立てた神話の鬼  
神サテュロス(?)の絵葉書などを売っている。  
私たちは、少しずつ迫る夕闇の中、活気を取り戻  
した街の中をホテルに戻った。

夕食後、明日からの行程を確かめるために改め  
て地図を調べた私は、パルテノン神殿のあるアク  
ロポリスの丘を取り巻く環状道路が「ディオニシ  
オス・アレオパギティス通り」と名づけられてい  
ることを知った。ディオニュシオスの名は、アテ  
ネから遙か離れた東の果ての日本でその名を知っ  
た私の想像を遙かに超えて、その名を巨大な教会  
と通りの名に留めている。

\* \* \*

翌日からの計画は、古代ギリシアの遺跡を中心  
に進んで行った。

まずは町の中心にあるパルテノン神殿と、そこ  
に隣接するディオニュソス円形劇場の跡に赴く。  
若きプラトンは、初め詩人を志し、悲劇作品を書  
いて賞をもらおうとしていたが、この劇場の前で  
ソクラテスに咎められ、作品を火中に投じて哲学  
者になったという<sup>(6)</sup>。そこからフィロパポスの丘

(6) ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学  
者列伝』3.1.5。

へと続く広い石畳の道を歩きながら、ソクラテス  
が幽閉されていたという牢獄の跡を見る（こんな  
に狭い所にソクラテスが幽閉されていたなんて、おそ  
らく嘘だろう……）。ただひたすら、強い陽射しと、  
その陽射しで暑くなったゴロゴロした地面の照り  
返しの中を歩く。裸の木の幹には、見るだけでも  
巨大な蟬（5センチはあるだろうか）がジージーと  
鳴いている。およそ朝から、木陰なるものにはほ  
とんど出会わない。渴いた空気のせいで汗は出ず、  
皮膚の表面には細かい塩の結晶が出来て行く。ガ  
イドさんの奨めて朝キオスクで買った2リットル  
のペットボトルの水がみるみる減って行く。

夕方ホテルに戻ったとき、私たちは、1日中浴  
びつづけた強烈な太陽の光と、暑さと脱水症状と  
でぐったりとなってしまった。体のほてりは夜に  
なっても収まらず、生温かいベッドの上で1晩中  
汗をかきながら寝られない夜を過ごした。夜中に  
ふと窓の外を見ると、通りの向い側のビルには煌  
煌と灯りがつき、中では人々が忙しそうに仕事を  
している。一体、アテネの人々はいつ眠り、いつ  
仕事をするのだろうか。

第3日目からバス・ツアーの旅が始まった。ア  
テネを出発した私たちは、殺風景な工業地帯に変  
貌してしまったサラミスの海岸を左に見ながらコ  
リントス旧市街へと向かう。オイディプス伝説と、  
王女メディアの物語と、パウロによって非難され  
た淫蕩と同性愛の教会とで知られた町だ。それか  
ら、ペロポネソス半島に入り、半島東岸を南下し  
て、1万4千人以上の観客を収容できる巨大な円  
形劇場で名高いエピダウロスを訪れ、夜は美しい  
港町ナフプリオンの小さな民宿に泊まった。

4日目は、ナフプリオンからミケーネ（ミュケ  
ナイ）の遺跡を見て、半島中央部に入り、スパル  
タのホテルに投宿。ミケーネ遺跡の周辺は、赤茶

けた肌を無惨にもさらけ出した見渡す限りの禿山とそこに点々と栽培されているオリーブの樹々という景色だったが、スパルタの町は、ドイツからの国王時代に整備されたとのことで<sup>(7)</sup>、都市計画が整然と行き届いていた。道路の中央分離帯は広く、高さ数メートルはあろうかという蘇鉄が整然と植えられている。

5日目は、スパルタを発った後、十字軍の要塞を起源とし中世の時代にキリスト教ビザンツ文化を発展させたミストラの遺跡<sup>(8)</sup>を見てから（ブルーのアイコンが美しかった）、黒山羊が群なすアルカディアの山脈に入り、そこからペロポネソス半島西岸に下り、海岸沿いを北上し、一路オリンピアに向かった。炎天下のバスの旅は長く暑く、エアコンを最強にしても車内は少しも涼しくならない。夕方、糸杉の森に囲まれたオリンピアの町を車窓から見た時には、砂漠の中を旅してオアシスにたどりついた旅人のように、ホッと一息をついた。

6日目は、オリンピアの博物館を見学してから北上し、コリントス湾をフェリーでギリシア本土に渡ってから（フェリーのデッキから見た海面一杯に浮かぶくゞげの大群が凄かった）、デルポイに赴き、ソクラテスが「自分より知恵ある者はいない」との神託を受けたアポロン神殿の遺跡と、古代オリンピックの競技場と、「戦車を駆る少年」Wagenlenkerの像で有名な博物館を見学した。1頭立て

の戦車を駆る等身大の少年の眼にはガラス玉が詰め込まれ、まつげまでも再現されている。それを引く今にも動き出しそうな馬のリアルな表情と身のこなし、両者を繋ぐたづなの躍動感は、一度それを見たら二度と忘れることができない程の強い印象をもたらした。

そして翌7日目、デルフィ（デルポイ）のホテルを出発した私たちは、一路東へと進み、アテネへの帰途の途中でオシオス・ルカス修道院に辿り着いたのである。

\* \* \*

オシオス・ルカス修道院は、デルフィから37キロ東、アテネ西北のヴィオティア（ボイオティア）地方に位置するビザンツ文化の代表的遺跡で、10世紀に建立された。この地方のかつての中心地テーベ（テーバイ）からも遠くない地にある。建立者は、「聖人」（オシオス）と称される柱上隠者<sup>(9)</sup>ルカス（896-953年頃）で、彼は長年にわたる

(7) 1830年、オスマン帝国から独立したギリシア王国は、1833年2月、ドイツ、バイエルン国王ルートヴィヒ一世の息子でルートヴィヒ二世の叔父オッターを初代ギリシア国王オトナー一世として迎えた。彼は、1862年に革命が勃発して退位するまで、国王として留まることになる。

(8) 後で知ったのだが、ミストラ遺跡の頂上にある要塞に赴くと、その裏に深く峻しい谷が見える。古代スパルタの人々は、ひ弱な赤児などが生まれると、軍事国家スパルタには不要のものとして、この谷に投げ棄ててしまったそうだ。

(9) (Stylites) 柱頭行者ともいう。神殿遺跡や教会遺跡の柱の上で生活し修練する修道士のことで、シリアのシメオン（390頃-459）が開祖とされる。キリキアとシリアとの国境付近に生まれた彼は、修道院生活などを体験したあと、北シリアのテラニッソス近くの山奥に分け入って、そこに石の円柱を建て、42年の間、毎日夕方柱の上に昇り、翌日の午後まで柱上に留まって神を礼拝し、その後柱から降り、やって来る参詣者や巡礼に教えを説き、助言と祝福を与え続けた。柱の上に立ったのは、少しでも神に近づこうとするためであったと考えられる。柱は何度か建て直され、そのつど高さを増し、最後の柱は高さ16メートルとも19メートルにもなったという。柱上には、台のまわりに木の柵をめぐらしてそこに立ったというから、かなり太いものであったようだ。

シメオンの評判は、ペルシアやスペインまでも広がって行き、彼が459年に柱上で世を去るとこの地は聖地となり、シメオンの柱を囲むようにして石造の大聖堂がローマ皇帝によって建設された。彼の遺骸・聖遺物は、アンティオキアを経て、ボ

柱上隠者の修行の後、悟りを得、945年、この地のデメテル女神の神殿跡に修道院とこれに付属する教会を建設した。その後、1011/42年頃、十字架型の外形をもち中央にドームを有する中央教会<sup>(10)</sup>が追加されて現在の形態になった。

バスから降りた私たちは、女性ガイドに導かれて中央教会に赴いた。入口の上部には、金色の背景に浮き出た建立者ルカスの半円型のモザイクが設置され、いかめしく入場者を睨んでいる。そこを歩いて内部に入ると、そこはこれまで経験したことのないおごそかな空間だった。そこここに小さな窓が造られているため、それほど暗くはない。

床は茶色を基調とするモザイクで美しく飾られているが、十字架型の中心とおぼしき一点には40センチ程の円形のマークが埋め込まれている。周囲の壁には、層をなして様々な人物が描かれている。注意して観察すると、描かれている人物は、下から順に、一般の人々、旧約聖書に登場する予言者たち、キリストの12人の使徒であることが分かる。その上の層には天使たちが描かれているようだ。ドーム型の天井には、「永遠」を現す輝くばかりの金色の背景に「パントクラトル」

---

スボラス海峡沿いの柱上隠者聖ダニエルの修道院に運ばれた。こうして、柱上隠者の修行は、シリアからギリシア一帯に広まり、10世紀ごろまで続いて行くことになる。

なお、アナトール・フランスの『舞姫タイス』に登場する修道士パフェヌスは、シメオンをモデルにしている。彼は、エジプトの遊女タイスを回心させて敬虔なキリスト教徒に育て、ついには聖女へと導くものの、信仰とタイスへの渴愛との間で引き裂かれ、ついには狂ってしまう役柄として登場する。マスネの「タイスの瞑想曲」は、この小説を題材にしたオペラの一曲である。

(10) ギリシアの教会は、西ヨーロッパの教会のように、一辺の長い十字架型ではなく、赤十字のマークのように四辺均等な十字架型をしている。

(全能の主)と呼ばれる父なる神のモザイクが描かれ、黒髪を中央で分け、濃い鬚をたたえた顔で私たちが厳しく見おろしている。

ツアーの一行が息を飲んでいると、女性ガイドがひとりの男性を紹介した。年の頃は40歳位だろうか、背は160センチ程、がっしりとした体つきで四角い眼鏡をかけ、白い半袖のワイシャツにネクタイをしている。眼鏡の奥の眼光には何か鋭いものがあった。

「私は考古学が専門で、この教会のことをガイドすることはできないものですから」と女性ガイドが言った。「この方にガイドとして来ていただきました。これからこの方に説明をしていただきます。」

女性ガイドはそう語ると、壁際の石が段になっている所に腰を降ろした。紹介された男性ガイドがおもむろに語り始める。ドイツ人たちは神妙に彼の言葉に聴き入っている。

教会の建立者や設立年代、沿革などについてのひと通りの説明の後、彼は、まるで説教を始めるかのように居ずまいを正して語り始めた。微妙に顔つきが変わっているのが分かる。

「この教会の構造は、神の教えを表現したものになっています。皆さんは、この教会に入って来たとき、建物の構造が前後左右に十字架の構造をしていることに気づかれたでしょう。そしてこの教会の中から上を見上げれば、上にはドームがある。実はこの教会は上下に向かっても十字架の形をとっているのです。前と後、右と左、上と下——この6つの方向は神の6日間の世界創造を示しています。そして、ほら、見てください。このモザイクの床の中央には円形のマークがある。このマークは、前後・左右・上下の3本の線がちょうど交差する点に置かれています。これは、神の



世界創造の完成、7日目を示しています。神は6日間で世界を創造され、7日目にそれを完成させた。この教会は、その象徴として建てられているのです。ですから、この内部の空間は、私達が生きている世界そのものなのです。」

周りを見回すと、聴いているドイツ人参加者たちの顔が、驚きと困惑によって微妙にひきつっているのが分かった。中には、いかにもこの場から逃げ出したそうにしている老夫婦などもいる。東方教会のシンボリズムは、彼らには遠いものなのだろうか。

「では次に、彼の言葉は次第に熱を帯びてくる。「周りのフレスコ壁画を見てください。ここの壁画は層をなしています。一番下に描かれているのは、救い主が誕生された頃の人々の姿です。紀元1世紀の頃、世界には様々なことが起こり、人々は苦悩から脱却するために、ひたすら神に向かって上昇しようと思うようになっていました。皆さんもプラトンやアリストテレスの名は御存じでしょう。彼らが行ったのは、この世の苦悩から何とかして脱却し、神に向かってゆこうとすることに他ならなかったのですよ。」

「その上の層を見てください。描かれているのは、旧約聖書に登場する予言者たち、神の言葉を人々に伝えながらも、神よりの救いを待ちのぞんでいた人々です。そしてその上が12使徒たち。人々の上昇への願望に応える形で私達のもとに下って来られた救い主キリストの教えを伝える人々です。」

「そして、紀元1世紀の時代の人々が抱いていた苦悩や神への上昇の憧れの思いは、2千年経った今でも、少しも変わってはいません。このことは、ここに来られている皆さん1人1人もお分かりでしょうか？」

彼の言葉はますます熱を帯びて来た。彼はツアー

に参加しているドイツ人ひとりひとりの所に赴き、自らの顔を相手の顔から20センチ位の所にまで近づけ、相手の顔を覗き込みながら問い始める。

「あなたも分かるでしょう?」「あなたも分かるでしょう?」……

その表情はまるで、新興宗教の教祖が強烈な言葉で信者を折伏でもするかのような異様な雰囲気を感じている。「そうなのです」と彼は続けた。「救い主キリストは、今の時代にも皆さんが感じている神に戻りたいという思いに応える形で、天から神々の力を受けて、この世に下って来られました。」

「えっ?」とその言葉を聞いて私は思った。「キリストが神々の力を受けてこの世に下って来る? この人は一体何を語ろうとしているのだろうか? この人が語っているのは、果たして正統的なキリスト教なのだろうか?」

周りを見回すと、すでにかかなりのドイツ人参加者の姿が消えている。カトリック教会の教えやルターへの教えに親しんで来たドイツ人たちには、このガイドの語ることは余りにも異様なものに映ったのだろう。

私は家内に尋ねてみた、「何かこの人の語ることはとても変な気がする。この話を聴くのは、もうやめにしないか?」

すると家内は答えた、「この人の語ることは確かに変だと思う。でも、この人の話は『現代のギリシア人たちがキリスト教をどのように捉えているか』を知るためには役に立つんじゃないかしら。」

私と家内は、留まって話を最後まで聴くことにした。

彼の言葉はますます熱を帯び、話は結論に向かって進んで行った、「キリストは、私たちの悩みを知るために、この世界の底の底にまで下ってこら

れた。そして十字架につけられて殺されたのです。」

そして話をこう結んだ、「ですが、彼はそこには留まりませんでした。キリストは、死者の中から復活し、酒神ディオニュソスの力を受けてアポロンになったのです。」

この結論は、私をも家内をも驚愕させるに十分であった。「キリストが、ディオニュソスの力を受けてアポロンになる」——この言葉が、私の頭の中をグルグルと駆け巡っている。見ると、僅かに残ったドイツ人たちも呆気にとられている。

話が終わって一瞬の沈黙の後、傍らで聴いていた女性ガイドが立ち上がり、おもむろに話し始めた。

「私はこれほどまでに感動的な話をこれまでに聴いたことがありません。今お話しくださったこの方は、実はギリシアのキリスト教界ではかなり有名な方で、多くの論文も発表されていますし、テサロニキ大学神学部でも教えておられます。」

女性ガイドの言葉は、男性ガイドの情熱的な説教(!)よりもさらに私たちを驚愕させた。

「とすると、彼の話は決して特殊なものではなかったのだ。ギリシアの教会の中では、ごく普通の話だったのだ」……

これまで私は、東方ビザンツ教会の神学や思想について、多少なりとも勉強はしてきたつもりだった。ガイドが語った〈上昇—下降〉(アナバシス—カタバシス)は、私にはすでに馴染みの思想だったし、「ビザンツの神学思想は、人間の神に向かったの上昇(アナバシス)の思いと、神であるキリストの人間世界への下降(カタバシス)との《交錯》の中に成立する」ということも知っていた。

だが、「キリストがディオニュソスの力を受けてアポロンになる」——こんな話は聴いたことがない。しかもこの話を、テサロニキ大学神学部で教えている研究者が語っている。テサロニキは、新約聖書に出てくる「テサロニケ」だ……

アテネに戻るバスの中、私は呆然とした頭の中ですっとひとつのことを考えていた。「イエスによって告知され、パウロが伝えた原始キリスト教の正しい教え(オルテ・ドクサ)は、人間の悲惨と罪を強調し、人間と神との間の断絶を強調するアウグスティヌスによって根源的にゆがめられてしまった」という、東方教会の人々の主張をである。だからこそ、彼らは自らの教えを「正教」(オルトドクサ)と称しているのだ。

アテネのホテルは、旅行第1日目から2晩を過ごしたのと同じホテルだった。前回ここに泊まったのはわずか1週間前でしかないのに、それからいぶん時間が経ってしまったような気がする。その晩は、死んだように眠った。連日の暑さに、体も慣れて来たのかも知れない……

\* \* \*

旅行最後の日、ミュンヘン行き飛行機は午後出発で午前中の時間が空いたので、私と家内は、アテネの「ビザンチン博物館」を訪れることにした。紀元4世紀の教会堂(バシリカ)の内部が復元されているとガイドブックで読んだからである。

博物館はアテネ中心街から少し離れた静かな住宅街にある小じんまりとした建物で、復元された教会はその2階にあった。訪れる者は私たちのほかほとんどいない。

入場券を買って建物に入ると、1階にはギリシ

ア正教の典礼の概要とその歴史を示す展示物が並んでいた。あたりには香の匂いが立ちこめている。大主教が典礼の際に身につける金糸で縫い取りをしたガウンや首かけ、そこで用いられる香炉や杖などを左に見て、赤い絨毯の敷かれた広い階段を昇ると、その右側に復元された教会堂の内部が見えて来た。

白塗りのドアを通過して中に入ると、内部はほとんど真白で、殺風景な印象だ。少し時間が経つと、その印象は、教会内部がほとんど白い大理石でできていることから来ているのが分かった。

正面には、大理石でできた、あまり飾りもない大きなテーブルが置かれている。天板は、厚さ20センチ位もあるだろうが、大理石の一枚石だ。幅は2メートルはある。古の説教者はこの前に座って聖書の写本の開かれた書見台をこのテーブルの上に置いて説教をしたのだろうか<sup>(11)</sup>？ ミサもまた、このテーブルの上にワインやパンを置いて行われたのだろうか？ 様々な想像が膨らんで行く……

ふと周囲を見回すと、教会堂の壁が様々なレリーフで飾られているのが眼に止まった。これもまた白い大理石だ。見ると左の方に何やらゴチャゴチャしたひとつのレリーフがあって、その前に解説板が立てられている。そこにはおよそ次のような言葉が書かれてあった。

「このレリーフは、ギリシア神話に出てくる音楽家オルフェウスです。彼が豎琴を奏で、美しい声で歌うと、動物たちも怒りを収め、人も木も石も動きました。最愛の妻エウリディケが蛇に噛まれて死んだとき、オルフェウス

は冥界に下って、音楽で神々の心を動かして彼女を地上に連れ戻そうとしましたが、古代の教会は、このモチーフを復活を示すものとして用いていました。」

この言葉に促されてレリーフを見ると、それは確かにオルフェウスのレリーフだった。中央には豎琴をもったオルフェウスが描かれ、周りには熊やライオンなどの動物が仲睦まじそうに楽の音に聴き入っている……

「へー」と私は思った。「古代教会はこのような形でギリシア神話を用いていたのか。とすると、昨日聴いた『キリストが、ディオニュソスの力を受けてアポロンになる』という話も、古代教会の人々にとってはあながち荒唐無稽な話ではなかったのかも知れない。」

私は、自分が勉強してきた中世哲学のことを考えた。ヨーロッパの研究者たちは、古代文明を「ヘブライズム」と「ヘレニズム」とに分け、両者をしきりに分別したがる。「トマス・アクィナスの新プラトン主義」などという論文は枚挙に暇がないほどだ。だが、古代の人々自身は、そんなことは考えてはいなかったのではないか——そんな考えが心の奥に浮かび、また沈んで行く。

そして私は、異教国日本のキリスト教のことを考えた。江戸時代のキリシタンたちは、自分たちの信ずる宗教を日本の宗教とは異質のものと考え、そのために殉教して行った。キリシタンを迫害した人々もそのように考えていた。そしてその構図は、明治以降現在に至るまで変わることなく続いている。だが本当にそうなのか……

\* \* \*

私と家内は、博物館から出てホテルに戻った。

(11) 古代の教会では、現代とは逆に、説教者が椅子に腰かけ、会衆は立って説教を聴くのが普通であった。



外は相変わらず強い陽射しが降り注いでいる。途中、CDを売る店があったので、“Byzantine Music of the Greek Orthodox Church” というCDを買った。

日本に戻って後、京都大学で行われた帰朝報告会でこのCDを聴いてもらおうと、中世イスラム哲学を専攻するひとりの後輩が言った、「ギリシア正教会の典礼音楽って、イスラムの音楽と同じなんですわね。」

日本とヨーロッパ、日本とギリシア、ヨーロッパとギリシア——それらの距離はまだまだ遠い。

そしてキリスト教もまた、遙かに遠い……

(了)

[付記] オシオス・ルカス修道院の外観、および中央教会内部のフレスコ画・モザイクの画像は、  
●<http://12koerbe.de/mosaiken/hlukas.htm>  
●<http://www.mlahanas.de/Hellas/Byzanz/Arch/HosiosLukas.html>  
などで見ることができる。

なお、ギリシア地名の現代ギリシア語におけるカタカナ表記については、ギリシア政府観光局の石本東生氏にご教示いただいた。ここに御礼申し上げます。